



藏  
禁  
秘  
藏  
法  
上

871  
28  
2

~ 13  
4011  
1





1104  
1



Handwritten text in vertical columns, including the characters '目錄' (Table of Contents) in the center.



11 3885





4013  
號4011  
卷 1



賊禁秘談卷之三

目錄

一 石川九道与信輝退治

附

一 信輝退治

一 賴政化鳥退治

附

一 河津退治

一 賴政退治



昭和四年七月八日  
齋藤俊六氏贈

44 2867



一 石川又吉百地之田中成事

附 妻武部石川の石地を知ら事

一 石川又吉久平の教事

附 女房妻武部井戸入事

一 白地の女房福業を謀事

附 此女房又井戸の同僚事

一 又吉白地又の女房と教事

附 伊賀武部家事



一 中村常隆の石川の御子成事

附 市野但馬守佐見事

一 石川又吉久平の館に御入後人と拾事

揚子事

一 石川又吉中須の御事

附 林右衛門忠入事

一 石川又吉の御事



附  
水口の家相傳事

賊禁秘誠卷之三

角八世唱法輝退事

附  
源信賴政卿事

宗人皇七孫代城川院の御宇同書に宗  
如僧君の事有るは中將亦陸奥守源義家  
朝臣唱法は是の法也亦皇七孫代  
通清院の御宇仁年之歳源氏始に化身成











信付一休と云ふ又西宮其智信頼と云ふ一  
為朝具負系れを成給に信付一休と云ふ  
信を信定匠と云ふ又水七に信信左大臣信  
信又云く信信の成給に信付一休と云ふ  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に

と未孫を自ら名に道と云ふ一其と奇なるも志有  
日外も林不庭を信信の成給に信信の成給に  
人と云ふぬ大因山乃山と云ふ  
本流と云ふの成給に信信の成給に  
信も信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に  
信信の成給に信信の成給に信信の成給に







相攻後と相争りては六乃忠初命ヲ以て裁き  
彼化多ク射敵一玉射りて其体ニ下リしを以て追撃  
ナリ同裏にて殿と争下りて其體ニ下リしを以て追撃  
信士少而も追撃を能く行ひ南宮を振奮せし感  
せぬと云ふなりなりと云はれ相攻後命を歸りて其  
子集丸初命を以て追撃を能く行ひ南宮を振奮せし感  
多し其中心に之種の標遠り事御家の事なるは  
此人の元も是れも是れも是れも是れも是れも

相攻まふ流流して其の流肌有る白小神の流  
所是も胎を白檀麻の小玉を種菊と云ふ葉  
信多し小流海老を以て將衣を流の流して有る樹  
之帷鳥を白流の神を長久流いしと云ふ今此の命  
常々先祖神光を傳りて雷と初のう征敵  
水破く其の以恭友も押載し依心して曰今日  
相攻從 林を初命に命永徳北ス先祖  
ら徳者の具加し其の命神其感有る化







帝其意不徳たつたを思はせり  
仰多し共今御機成りし中これ  
彼ら共進取雲中白ひんこと  
先相親政佐給しそ長たりし時  
光り候り候則親政も力より  
幅大菩薩と唱ふりしよふ川て  
あまのむぎもあつた村色の  
石根もかたて候きり其所  
後北一揆聖皇太

掛あてらりし御入右も  
之方御一これ化鳥文に不弱  
白眼はくしり子石の指も強  
終弱りて強りし其時雲と  
相親政も威をきり暫が  
北使の友一人機松附  
たすた人余りしそ大右  
尾先地を叩きり鶴が











おしるが被秀門の事あり 石川公麻呂をよこし渠が  
一子と云ふは公一の子未格をよこされ口量人の物も  
大開く事ども利縁を信く父を命をまもたは  
父祖の家名も縁をよこす者ト信り信く父名が母も  
父未格をよこしるが父不便か心信く育てあめ  
父名を縁氣信く人一人と思ひ一旦公名をよこす  
不愛行意地の若く信く父を命をまもは信く父名が母も  
よ失てい信承首の事と信く思付和泉ち被あて

為者新七と云ふ人便り有は父信より之は信信の信ひ  
られ信新七を信く父名和泉ち被の思ひ信く  
信新七の信くお朝メヨクと云は免角を信く  
信新七の信く信く又信信人かお擲一と云  
旧合を信く信く信新七の信く信く信く信く信く  
新七も信く信く信新七の信く信く信く信く信く  
信新七の信く信く信新七の信く信く信く信く信く  
信新七の信く信く信新七の信く信く信く信く信く  
信新七の信く信く信新七の信く信く信く信く信く



又今又實獨り成指々形儀券  
下も難儀成れば其頃百地定又と云はしりり  
信は元来信實の流くを本術にまじりて其の  
術の流き古解法有りてと云ふより打食花  
沈る網多故十程香も尚ふお飯有葉  
ふ名香飾ありて多故大酒多故思悟く恒食  
色に沖度手は取れば石知能に信は又と  
事都違ふ門大酒多故方く事と取れ成

極何の事亦法佛と云有付は事如法儀あり  
其方より使ひて事ありてや作れはと云又一  
亦及も思ひ種法存く其の術の得るは  
法は易恒儀の法は多し大酒多故恒食  
時に云ふも思ふありて其の如くは殿の  
給告ありて免國の家事ありて思ふ  
是方亦中流ありて事の本通例の  
官給ありては高令水は意を代



多しと云ふに此の如く深く隠し置きて人前に容れず  
し一に網を殿にたなせし法は浅はし御長身は何  
かおやと思ふに元来はせし事なれど肉體を令法  
重き事とせし事なれば或は下女や妻に  
と下女の定又人懐かには下女と又或は伴  
ひ石川村を帰るに別家他を或は我妻と  
別したる事あり又十程の海に東の北島も或  
堂と名の事ある事是の法は有て退散し任付たり

徳に定又ハ彼の或は酒をくそ居りし方同村  
彼の別家女は住居たりし方之程成長しそ又振七は  
死にたる元服してても別當と者といふに又  
言もわく入意してそ其のり定又夫婦も父母が  
志ぬ定又も徳に思ひの休のし中やと云はる御  
り元来は教明ありし法は浅はし御長身は何  
得て定又も家業のり法者といふ定又下女に  
秘法述は傳はるる方右に花の此の網を敷き



貫一或知の色は深の明言罷也して由業  
何とて云かぬや文書見深能折る三太史の  
妻部もろふ女房も或部を見習らして一六  
居事事忘れ終文を随ひ多を程に事申し  
不出書事事多し汗多き事又又あゝ人烟に  
流用有てと申し一多け事多し又又い  
上首尾に初毎思ひ過ひ多夜重り此は終に或  
是恒る六六六取田其川初毎思ひ夜に

た我お退こ下庵自裁うあ的事も大踏に成  
あ思の何も事六進あん志の物に又又思  
た七不事七一事得と見届けた種又又  
是知也日比の恨と散んと心付て初  
考一たり方女房の事も是知り今首も又又  
悪ハせん御障の言也如抑が友居り物に  
見深一或部知部思ひ初事居一居の  
知らぬ類もえの初居り御方の明ふ其位  
お











婆の限世一トありの姪を得どもその心付ふに或  
老の家系入テ鼻あつせに物をも公取或部奉  
よふ人其家内は皆さか由妻の部包く事  
或部は今に権持のしりかて罪に藤ををぬる  
し内入らんよといふに又古の婆安ん見んは  
し妻を産付たる神を居る依し或が果相違  
し合志はぬ事い高不忠入物子高区す小  
今の言ひんぬねね日頃した文の習はし思の

術を注女有限也一物高しこけは六是此も家一  
何は日録にたんか事の時高し三たより戻りか  
け由若しし妻の遊ぶとんを信改してま  
久平式経を家経包入体りり

石川女久平の教は事

附 女房長或部井入事

新の女房長或部久平と遊は後ハ初のと  
潤のまを人のかして心掛に交言加何人思ふ







河原がく西てらるる者やトれは久平はこえ  
東好の事やとていせや安事事思ふ成程相  
心はゆや其日の事命久平はかえはゆり  
何事もおらる久平は仕所をとりて市を  
美のの腰を授け見入隙に久平は流し  
新といふ久平は能く亦りん是の網紙と  
入る好念を久平は揚る後をぬき奇技を  
府はるる者やとていせや安事事思ふ成程相

金幣く行系成莫不為隙一与所是使神  
乃との批燈やとていせや安事事思ふ成程相  
して竹者に南所やとていせや安事事思ふ成程相  
其後批燈やとていせや安事事思ふ成程相  
側金久平は左き方カヲ振問絶一き者者の之角  
其向は久平は亦不飛やとていせや安事事思ふ成程相  
帰るる形を夜照及は差當久平帰るる事  
なとていせや安事事思ふ成程相



祇付者死體有相、綱外に三行掛、喧嘩  
し、因士付、成事り、下沙法有る、是而終、事深  
る、又其、仕所、事、下、候、居、又、女、肩、は、上、成、事  
殺、下、也、事、也、一、高、成、終、り、細、成、り、候、事、  
事、成、終、り、前、法、も、不、知、痛、依、事、女、肩、は、是、社、是  
事、成、終、り、下、振、事、一、お、お、包、下、り、振、事、候、事、成  
終、り、上、に、請、り、咽、笛、揮、尚、日、頃、一、ま、込、事、一、か、  
力、に、使、せ、揮、り、れ、キ、ヤ、ツ、ト、云、テ、死、事、り、  
仕、所、一

た、事、と、心、辞、に、死、體、横、抱、テ、裏、座、に、掛、り、  
の、石、の、信、布、に、挿、入、を、檀、の、片、を、成、井、三、件、  
ぬ、り、投入、あり、り、見、道、一、胸、振、下、一、知、り、ぬ、顔、  
を、見、入、候、一、は、誰、有、て、知、る、者、は、進、事、  
百、地、の、女、肩、細、集、事、謀、書、事、  
三、太、又、井、三、の、布、の、何、事、  
三、行、に、三、太、又、女、肩、を、事、成、終、り、  
し、の、知、り、事、懼、事、若、事、成、終、り、  
事、成、終、り、事、成、終、り、事、成、終、り、



或部種のよに掛テ殺し多か。又思ひ多し。初時系の家  
同のよに掛テ一家おの種。セ下浦のよに時重と奔の  
種。セ下武マの種。書を系とて。中下や。破川等  
ニ下リに下リ。去るがや。世に。系子。種。知。ま。ま  
必。定。之。知。種。分。取。ま。た。理。系。を。知。り。て。徳。こ。思。集。  
セ下。急。が。四。貫。海。家。の。又。採。心。日。倍。倍。増。  
セ下。急。が。又。よ。抄。記。容。書。の。送。若。途。中。に。て  
産。一。又。人。の。系。集。し。時。に。人。事。の。計。小。種。

子。種。や。ま。ま。の。種。の。筆。尾。に。結。久。重。り。の。け  
此。の。腕。腕。下。掛。り。脈。の。時。を。其。の。系。年。の。し。り  
お。テ。相。透。し。て。お。ま。ス。又。下。知。ま。ぬ。ま。ま。の。し。り。中。  
お。ま。ま。及。も。種。の。其。通。に。セ。よ。ま。ま。の。種。の。又。下。後。の。  
セ。一。と。ま。ま。の。又。系。子。の。一。通。の。書。重。の。徳。と。連  
お。細。の。お。一。筆。尾。の。腕。腕。下。掛。り。紐。の。し。り。の。種。の。種。  
強。付。筆。の。途。中。に。下。り。の。系。と。合。て。筆。本。先。の。し。り  
る。る。の。系。本。に。ぬ。る。徳。の。し。り。の。書。重。の。徳。











保しあの子掛を承久忠を食事止しり候事  
けしき重人の知る時、初てと味の殆ど隠ぬれ  
て心能けに打ちしり、  
ちかぬ之傳りし一向も知有りり、女居の忠儀小  
中、深せ心愛を常しり、又今月日重子承  
宗早始暑者、顔あくの猶も照し、痛し、若衆不  
建し、それい言合、及て之を又、水うま、と狗瓶  
ありて、水うま、粒粒、塩湯と一時、甚、冷ましく

自の思し、髪のも狗瓶、熱し、と承り、とバ人、憤し、  
得し、見せし、い、よ、と、女、の、好、友、の、も、承、り、し、時、自  
泡、を、湯、ま、り、た、合、志、行、ぬ、井、の、内、今、年、際、  
水、の、う、ま、い、に、盛、り、あ、り、た、所、を、何、と、し、  
入、り、て、披、り、た、何、や、私、に、成、お、年、の、は、ん、あ、り、  
怪、水、の、盛、り、あ、り、に、泡、を、つ、ま、と、と、甚、好、友、の、  
今、も、お、仕、立、罷、り、見、え、を、承、り、し、投、き、ま、  
或、信、に、時、は、り、此、罷、り、し、事、承、り、



物に違ふは極少くは能く得ぬの事  
是は子細く有るに似せしむ井戸が改めし味  
分外な事と思へ今有るは極少くは能く得ぬ  
別張早米の味は明の事とせし味は極少くは能く得ぬ  
良膳各改め家来は明の味とせし味は極少くは能く得ぬ  
柳子らん事有るは入の者も傳へし味は極少くは能く得ぬ  
云々

又吉田の女房の教書事

附 信長と或部城の事

斯く女房の事、傳の保と或部の者の味は茶  
やうに味の事、井戸水習やうに人の味は  
原の事、懼し思ふ事、虎骨の味は、  
少くは日印の柳子或部ある中、  
或部は謀て切殺し、  
付て泥金御筆にて書出と傳へし味は、



はやく仕度やがて文王殿樹木を以て感こせ  
自う水取雷河とく小人是れ水色碧を白の  
思ふ久しに明井戸を極むる原を事必定  
や今台巾に兼中啓せし通り種と連は家  
と遠く何れか共ぶる道と一也也原付  
たふ守を中らるればとすてたふ久台も  
大膽なる女の仕業と下身の毛もまたつてた  
惘と惜く返るる事か思ひまゝ連と近時

那忠修しき心危く法に家とせも害せしも縁中  
と遠時針に原中へ必更く人事に及む心は  
中らるる神身逢しき事と法はく道私事  
名南雄弟を法徳と別すか為らばとて一也  
かた其美の氣をいばあふと今又と贈書し  
金子有り是より西と遠くせし信納し今  
百と金持出し久き法しそそ法徳は首  
今月には法と相承る原の井戸を極む







扱るる其の体とて之を又家来の呼ぶ  
明の庭の井戸と替へてか入の老が付也  
傳くくも傳ふものん其の乃てぬと茶  
のりりりて白川と名をよとせむきりか  
庭の事ふれりも此の庭の種の子居  
相家の別限を庭に扱ふ事せぬ切戸と  
んやとるう又吾郎とわをぬかた左眼切を  
又吾一膳端え寛けはるる女居の事

又吾一戸庭と身と限一扱もモリ名一付切  
付る解り端の事切はるる切戸の扱切の  
先分乳の下しすし端えを切きりきり  
例にせらる位海きりト又吾一扱切の事  
君の内とて又とてとてとてとてとてと  
少く先指もふ久しん付もきりや白刃扱  
近う汗向ふ一村の者人傳ふ令帰と批  
扱多持来りぬ又吾一扱切の事



道の詮方系久も業の文重業は行無地地  
切度一廻りらるる毛りんて移るく百性子元(奇也  
りや武之人(近切例一傳り書りま一近り  
りしと右又夢に移るるをいふかんとて六女居居  
昔の神火のも負と家来かを極の二揚を  
家来も信をそと家と曲者と居る村のまとも  
追くかきまじり信あ神のころま服の事ありん  
云い共今曲ととた所こころ百性なり共今奇  
今も之度多掛何者か地燈と切度一様或人  
切伏しや云りまじり相い女居居と切しもまあ業  
家言ん何者かあまやと尋りまじり人か切  
信の文書なりん中たりしと定又中か一人に文書  
の宅占りて見んまじり長い程のあゆしと箇まじ  
神の道に川ぬしと今分りて居る女居居と  
女居一初りんまじり衣服と看替抱へ業り  
同色衣若替扱入お女居と解系れしと女居







既而井智の七と付て於此に人本ヲトシ  
多進んせし相ありこ何年一喜の言とせ教也  
実名と記し一をといひられ大早事とて一  
系一先此縣とて行村心の掛に井戸の内智ハ  
テテ教と教人ト相言ふを替へてかあるは  
水底に龍有り引揚りんまの形に換へり  
人相の女也昔相り或は長髪を相り容面付  
或はとてかとの若し事恨教事にお返し

是事事明自也又昔も巫電女居も教を  
勿れは證據ならん定なり一石便成り或は  
憎みの女居又古事い何食の以ん或は  
或も物と相ふりうと井戸の埋小言久能と  
其う伏せ名の暮と建室那の何有り暮下  
系一里人も長とと僅り唯り名と付りた  
伊賀國或は塚とて供ふりなり形も又古  
今も有る國也一女と教り伊賀國の遠近部



（一）  
其以人園委麻波東人佛以建  
て対介般東昌之人以亦僅の石と僅りて  
位在りる冬食の及内食と以名一朝書は  
也。備も獨りの浪人（住らざる事も亦久  
放捨我信の事一りた）人亦骨物人勝もて  
其の又六人武守力強く武勇の百地流の傳  
り（細柳子孫）武之誰（とも下に見下り  
人石も亦も）もるる浪人抑行入也抑與と

系一りれ、野の金根も亦亦の（ま）抑系久細柳  
師能セト百地の百地も亦亦の百地其の  
有六人一人亦亦人回思と以名一朝書は  
せんも細中かたのせとま一も、推下と、會せ  
本村常陸の所あり使亦り抑も石月也、亦の使  
打浦にも村の宅上りりる

本村常陸の所あり使亦り抑も石月也、亦の使  
附 亦亦但る守使見たり事



富の由村常陸の由を重と名者有り又由月  
集の由連人園神幼年時海の志津の嶽  
会戦の時以て使へ常陸の先陣と追部一越前  
追入福家の自害と申一其言名指君平ありて  
河内威の城は遠の城なり其言名指君平ありて  
死してその子常陸の由の家督と継ぎけるが御代  
一由の由を故由村の由の由の由の由の由の由  
と矢張り由の家督と成りて其言名の由の由の由の由

由村時名と自ら合はるる由の由の由の由の由の由  
ふれども其の由の由の由の由の由の由の由の由  
法を以ての由の由の由の由の由の由の由の由の由  
後由村の由の由の由の由の由の由の由の由の由  
一由の由の由の由の由の由の由の由の由の由の由  
の由の由の由の由の由の由の由の由の由の由の由  
由村の由の由の由の由の由の由の由の由の由の由  
其言名の由の由の由の由の由の由の由の由の由の由



そんが新しき人のけりたる大酒地孔腕之の道お  
まふかんのゆきや成て移る有くは天是書も  
家業の娘のひと操て情とらるるを思事の時よ  
か 懐かたかか病を休る人 胸をさう  
まふ又の女肩と書し 百歳の今まうたし味いそ  
あんな深き難忘思事増長は系流のこころま  
たのこころ自然と思事者の操深き情をさうと書  
大園の依りんは深きつて大石徳高偏東を徳

兼て書る常陸の依りんはまをさるれば又と書し  
竹葉肺はさのこころのつらば外秋因系を又の代は  
蔵地遠きありらるるたに安念に病を休る。所  
らに情とあふんは書やし時枝まの思を情をさ  
つ能くつとあひの思と。お書やしつらふか  
た身も物の移る思付合し加て心を書味  
し 便り書る小あ運の書しつら常陸の雨則  
左宮と道し程く客思そ本傳のせにありらる







但此を名に城と云ふ事右と雖も一は其内縁  
そむる事下の者共其の計りも亦人の謀り  
執業行共と云ふは似せ物に仁と使者と云ふ  
の事行居治痛と成家来由の事在在  
前聖の居る所一西の事計り今世も  
御侍安んずる事但る事御治を御治と  
君小の性急の計り附加する事御治と  
御殿の事計り付く事地来りも其の使者と云ふ事

二端の延引にお成りまゝ双方之念にお成り方付候  
使者の事計り入御事計り候事計り候事計り候事  
御下と云ふ事其述も事計り候事計り候事計り候事  
事計り候事計り候事計り候事計り候事計り候事  
傍中の事計り候事計り候事計り候事計り候事計り候事  
但る事計り候事計り候事計り候事計り候事計り候事  
一は其内縁と云ふ事高松城の事計り候事計り候事  
是と云ふ事計り候事計り候事計り候事計り候事計り候事















只一子老の入りも南無の威を返す或は海  
川より曲者道まゝふと切て然るはけ言も振きし  
ナヨコイナ老溺死形入むと苦よはくや屈々  
事いふまゝト今種とるの流せたるはじとお教人  
主人の中ね但る守り命の免せにぞ惜き海賊  
其大名の録送介の命石知切て裁り大膽お歌  
の邊賊天子ふとそそとけて取究は成りた方と  
お産一振余人のせとるよやと林ノりまは津宮

下都の振りも是道下はとてあつて振り  
侍振もは流石下都の想一さしをま向ひもや  
屈々居方殺多し女中奥方う圍ひまゝ  
目におらんせとて本方の箱を解り振た  
大將石月八言に眼死二王の由りまをさる  
人唐のふ布とははめを但る守か具是櫃とせ  
かたる腰打懸振重きとたを自通るにけ  
させ首筋端へは岸の振と守備はたせ力



何世も福も休れぬ腕はちまひとて苦しと歎  
ふたふ宮とて刃を下しこしき苦しと用金の有本は  
と痛しとあといひ但も守り命と取ると女あまを  
切捨こ其と家財を賣りて歸りて金程に難習  
まの命助にせ思つて用金有所あくは  
さ免付まはゆきとてまの命助に思ひ用金  
有本をくりられぬとてまの命助に思ひ用金  
腰懸し具とてあつて是れ武の具とて

取らぬとて命助に思ひ用金有本は  
たてて命助の從嗣丸根の筋金打たる兜系持  
歸りて命助に思ひ用金有本は  
兜の首に胸當りとて命助に思ひ用金有本は  
用金と入る中にも命助の命助に思ひ用金有本は  
命助に思ひ用金有本は  
命助に思ひ用金有本は  
命助に思ひ用金有本は  
命助に思ひ用金有本は















かゝるに法は具にるを及用令中を重んず  
悉く悉くはれは人の存亡無<sup>く</sup>過<sup>り</sup>一<sup>つ</sup>を<sup>も</sup>て<sup>は</sup>世  
に<sup>は</sup>疑<sup>は</sup>し<sup>は</sup>帝<sup>は</sup>一切<sup>の</sup>沙<sup>は</sup>法<sup>は</sup>是<sup>の</sup>く<sup>は</sup>く<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>家<sup>の</sup>中<sup>の</sup>は<sup>は</sup>高  
肉<sup>は</sup>を<sup>は</sup>味<sup>は</sup>及<sup>は</sup>下<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>白<sup>は</sup>石<sup>は</sup>知<sup>は</sup>人<sup>は</sup>強<sup>は</sup>力<sup>は</sup>を<sup>は</sup>具<sup>は</sup>と<sup>は</sup>常  
也<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>老<sup>は</sup>を<sup>は</sup>死<sup>は</sup>れ<sup>は</sup>て<sup>は</sup>邪<sup>は</sup>道<sup>の</sup>の<sup>は</sup>過<sup>は</sup>無<sup>く</sup>成<sup>は</sup>と<sup>は</sup>有<sup>は</sup>可<sup>は</sup>や<sup>は</sup>や  
多<sup>は</sup>法<sup>は</sup>して<sup>は</sup>由<sup>は</sup>國<sup>は</sup>を<sup>は</sup>奪<sup>は</sup>く<sup>は</sup>令<sup>は</sup>多<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>は<sup>は</sup>天<sup>は</sup>を<sup>は</sup>我<sup>は</sup>り<sup>も</sup>  
亦<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>云<sup>は</sup>但<sup>は</sup>守<sup>は</sup>守<sup>は</sup>豊<sup>は</sup>は<sup>は</sup>秀<sup>は</sup>法<sup>は</sup>の<sup>は</sup>沙<sup>は</sup>附<sup>は</sup>人<sup>は</sup>を<sup>は</sup>れ  
ふ<sup>は</sup>人<sup>は</sup>と<sup>は</sup>中<sup>は</sup>依<sup>は</sup>力<sup>は</sup>を<sup>は</sup>来<sup>は</sup>向<sup>は</sup>也<sup>は</sup>事<sup>は</sup>後<sup>は</sup>を<sup>は</sup>石<sup>は</sup>高<sup>は</sup>が

喜<sup>は</sup>と<sup>は</sup>及<sup>は</sup>大<sup>は</sup>國<sup>は</sup>の<sup>は</sup>神<sup>は</sup>類<sup>は</sup>城<sup>は</sup>を<sup>は</sup>秀<sup>は</sup>法<sup>は</sup>の<sup>は</sup>沙<sup>は</sup>害<sup>は</sup>く<sup>は</sup>帝  
但<sup>は</sup>守<sup>は</sup>守<sup>は</sup>も<sup>は</sup>同<sup>は</sup>は<sup>は</sup>く<sup>は</sup>抑<sup>は</sup>お<sup>は</sup>す<sup>は</sup>ら<sup>は</sup>及<sup>は</sup>切<sup>は</sup>服<sup>は</sup>と<sup>は</sup>作<sup>は</sup>る<sup>は</sup>城<sup>は</sup>  
も<sup>は</sup>亦<sup>は</sup>也<sup>は</sup>く<sup>は</sup>成<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>事<sup>は</sup>は<sup>は</sup>高<sup>は</sup>利<sup>は</sup>

石<sup>は</sup>門<sup>は</sup>を<sup>は</sup>其<sup>は</sup>中<sup>は</sup>の<sup>は</sup>秀<sup>は</sup>法<sup>は</sup>に<sup>は</sup>利<sup>は</sup>取<sup>は</sup>事<sup>は</sup>

附<sup>は</sup>林<sup>は</sup>の<sup>は</sup>中<sup>は</sup>に<sup>は</sup>忠<sup>は</sup>入<sup>は</sup>事<sup>は</sup>

後<sup>は</sup>石<sup>は</sup>門<sup>は</sup>を<sup>は</sup>其<sup>は</sup>中<sup>は</sup>の<sup>は</sup>沙<sup>は</sup>法<sup>は</sup>の<sup>は</sup>思<sup>は</sup>法<sup>は</sup>を<sup>は</sup>大<sup>は</sup>令<sup>は</sup>沙<sup>は</sup>孫<sup>は</sup>の<sup>は</sup>衆<sup>は</sup>  
其<sup>は</sup>衆<sup>は</sup>を<sup>は</sup>一<sup>つ</sup>人<sup>は</sup>抽<sup>は</sup>出<sup>は</sup>及<sup>は</sup>其<sup>は</sup>世<sup>は</sup>有<sup>は</sup>海<sup>は</sup>賊<sup>は</sup>を<sup>は</sup>捕<sup>は</sup>縛<sup>は</sup>  
其<sup>は</sup>衆<sup>は</sup>を<sup>は</sup>其<sup>は</sup>中<sup>は</sup>の<sup>は</sup>衆<sup>は</sup>に<sup>は</sup>被<sup>は</sup>召<sup>は</sup>す<sup>は</sup>道<sup>は</sup>に<sup>は</sup>と<sup>は</sup>其<sup>は</sup>衆<sup>は</sup>



福家休命ふけいめい不ふと頃ころ人園ひとゐんの対たいの茶ちやの湯ゆ成なり  
好この中ちゆうの心こころの五ご郎らう利り人にん始はじめ高たか田た織お部べ小こ坂さか宗むね利り  
瀬せ田た掃はら部べ茶ちや店てん名なと得とく一ひとと利り人にん湯ゆ師し利り  
一ひと制せい女にょ者しやうの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
是こゝ師し者しやう利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
名な屋や成なりと力ちからの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
好このううの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと

この心こゝの掛かを茶ちやの湯ゆ成なりと利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
年とし所ところの利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
道みちの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
を利り人にんの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
抱かかりし心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
す心こゝの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
大おほ心こゝの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと  
心こゝの心こころは茶ちや揚やう進しんも法ほふ同どう常じやう知ち一ひと















戸と取遣火治の習入に、几帳をうたうた大右  
のこゝろをなすくまをいそいで肉ヲ先取らば、女侍はう  
相いなる女も、ちかたをいそいで、目さすも、  
上をいそいで、奥と指して、こゝろをいそいで、  
明、有るをいそいで、先、白く、ふかう、  
心と結、燭、先、後、き、く、く、く、  
入、入、下、あ、け、り、亦、あ、眼、暗、く、  
い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、

あ、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
目、然、り、入、り、こ、こ、と、い、く、い、か、ん、  
寂、く、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
中、納、り、お、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
天、子、を、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
也、是、が、奥、の、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
も、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、  
寶、山、の、い、と、い、く、い、か、ん、や、反、氣、を、い、そ、



と情をいふ家今強賊の棟梁とて忠を  
とらふ一と今今は信守の事強賊の棟梁  
はね東に航程の事いふ事いふ事いふ事  
と度りの事も奥に国裁行とていふ事いふ事  
といふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
近心する事いふ事いふ事いふ事いふ事  
是る事たらん事いふ事いふ事いふ事  
系してこの世に帰る事

所附附附附附とていふ事

附水の中の事いふ事

物に世をいふ事いふ事いふ事いふ事  
おと其れいふ事いふ事いふ事いふ事  
を帰る事いふ事いふ事いふ事いふ事  
侍奉の事いふ事いふ事いふ事いふ事  
門殿の事いふ事いふ事いふ事いふ事  
女房の事いふ事いふ事いふ事いふ事



















中入集を以て後中は台名を得るに始り  
一 又遠田の領地を以て中領事  
村を以て此の書其右に遠田の事体凡  
後人の理北滞り揚て此に後事とバ工場  
可貴哉用後領地成也未批者の極同方あり  
然るに其領地杯と下と上とと恨る所は是れ其  
昔も後人の甚く措及の事也と後も是れ其  
何事も後人の思案に有事と云ふ批者も人の  
美ハ大切に後事ありと云ふ席に由んて沖  
津定に極附を惟ハ内門或國督重ハ切版  
改易をも及下り方未と相集りしり  
先領中付と云ふ上陳に用合り者未と云ふ  
たふ遠田の書思抑書とも領中既今百餘  
恨所の合由中由る附の件も及風声  
争い御家の人等遠田の内附領地村  
書と系を扱中らるんや相領して後人成



たの<sup>こ</sup>云とて子能<sup>り</sup>付んや一<sup>つ</sup>の種<sup>の</sup>池<sup>を</sup>  
して是<sup>は</sup>徳<sup>の</sup>國<sup>を</sup>也<sup>と</sup>も傳<sup>へ</sup>七<sup>の</sup>高<sup>を</sup>其<sup>の</sup>初<sup>に</sup>繼<sup>る</sup>た  
近<sup>に</sup>木<sup>の</sup>園<sup>を</sup>也<sup>と</sup>山<sup>を</sup>中<sup>に</sup>能<sup>く</sup>過<sup>す</sup>物<sup>を</sup>採<sup>り</sup>ん<sup>が</sup>  
重<sup>く</sup>は<sup>り</sup>通<sup>付</sup>にお成<sup>る</sup>事<sup>は</sup>其<sup>の</sup>家<sup>を</sup>多<sup>く</sup>ん<sup>が</sup>  
或<sup>は</sup>其<sup>の</sup>事<sup>を</sup>も<sup>の</sup>箱<sup>を</sup>箱<sup>を</sup>拓<sup>の</sup>中<sup>に</sup>今<sup>も</sup>入<sup>り</sup>  
通<sup>付</sup>の中<sup>を</sup>進<sup>む</sup>とい<sup>ふ</sup>時<sup>は</sup>其<sup>の</sup>途<sup>の</sup>人<sup>は</sup>浅<sup>く</sup>  
侍<sup>る</sup>者<sup>は</sup>後<sup>に</sup>人<sup>の</sup>城<sup>を</sup>引<sup>き</sup>て宗<sup>の</sup>物<sup>を</sup>城<sup>に</sup>付<sup>け</sup>て  
置<sup>か</sup>たり人<sup>の</sup>園<sup>の</sup>中<sup>に</sup>相<sup>の</sup>城<sup>を</sup>入<sup>り</sup>と<sup>す</sup>

家<sup>を</sup>老<sup>く</sup>妙<sup>く</sup>牧<sup>り</sup>多<sup>く</sup>後<sup>に</sup>人<sup>の</sup>主<sup>を</sup>智<sup>を</sup>入<sup>り</sup>智<sup>を</sup>種<sup>を</sup>せ<sup>し</sup>  
池<sup>を</sup>も<sup>を</sup>侍<sup>る</sup>も<sup>の</sup>池<sup>を</sup>入<sup>り</sup>連<sup>を</sup>侍<sup>る</sup>一<sup>つ</sup>の池<sup>を</sup>侍<sup>る</sup>  
人<sup>の</sup>園<sup>の</sup>中<sup>に</sup>亦<sup>に</sup>侍<sup>る</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>治<sup>る</sup>官<sup>を</sup>控<sup>を</sup>居<sup>る</sup>後<sup>に</sup>人<sup>の</sup>  
と<sup>し</sup>て<sup>も</sup>事<sup>を</sup>生<sup>じ</sup>ん<sup>が</sup>人<sup>の</sup>家<sup>を</sup>殿<sup>を</sup>侍<sup>る</sup>り<sup>に</sup>白<sup>く</sup>返<sup>す</sup>  
系<sup>を</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>例<sup>を</sup>世<sup>を</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>後<sup>に</sup>家<sup>を</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>  
一<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>役<sup>を</sup>命<sup>を</sup>忠<sup>を</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>事<sup>を</sup>  
人<sup>の</sup>役<sup>を</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>頼<sup>を</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>り<sup>に</sup>成<sup>を</sup>能<sup>く</sup>実<sup>を</sup>和<sup>を</sup>



中道批者批成下字是元何是暇内治作尔  
且原也物多七價生持年也猶餘江之浙墨家

賊案批成卷之三

齋類卷六

于時子保六乙未年仲春月

甲非及以汶於大坪

南小野性





通性者... 宗元... 日... 月... 年... 月... 日...



齊藤俊六藏

子集... 卷之...

齊藤俊六藏



